

一八八四年一月五日(土)

修行時代にベルの樹台で瞑想したこと(1859—61)——女と金の放棄

〔聖ラーマクリシユナ、郷里を訪れる——ラグヴィールの名で登記してあつた土地のこと(1878—80)〕
タクールは昼食をすまされた。時間は大体一時ころである。土曜日で一月五日。モニはタクールのもとに滞在すること、今日で二十三日目である。

モニは昼食の後、音楽塔^{ナハスト}に行つていた。——突然、誰かが三、四度、自分の名前を呼んでいるのが聞こえた。外に出てみると、タクールの部屋の北側の長ベランダから、タクール、聖ラーマクリシユナが彼を呼んでいらつしやるのだ。モニはそちらへ行つて師にごあいさつした。

南側のベランダで、タクールとモニは坐つて話をしてる。

聖ラーマクリシユナ「お前たちはどんなふうにして瞑想しているのかな？ わたしはベルの樹台^{カッタ}で瞑想していると、いろんな姿がハッキリ見えたものだよ。ある日はこんなものを——目の前に金と肩掛けと二皿のサンデシユ(ミルク菓子)と二人の女がいる！ 心に聞いてみた——『心よ！ お前、この中でどれが欲しい？』すると、サンデシユがウンコに見えた！ 女たちの一人は大きな鼻輪をつけていたが、二人の内部^{なか}も外もみんな見えてしまつてね——血管や内蔵^{はらわた}、糞尿も、骨や肉や血も！ 心は

どれ一つ欲しがらなかった。

あの御方の蓮華の足に、心は止まっていたよ。小さい天秤に下の針と上の針がある。心はその下の針だ。上の針(神)から心がズレないようにと、気が気じゃなかった。それに、槍を持った人が一人、いつもそばに坐っていてね。下の針が上の針から離れたらその槍でぶちのめすぞ、と脅かすんだよ。

とにかく、女と金を捨てなけりやだめだね。わたしは三つ捨てた——土地と妻と(原典註)金と。

ラグヴィール(ラーマクリシュナの生家の祭神、英雄ラーマの意)の名前で、土地が郷里(原典註)に登記してあった。わたしにサインしろという。わたしやサインしなかった。わたし(原典註)の土地という感じが全然しなかったからね。ケーシャブ・センのグルだというので、みんなたいそう尊敬してくれたよ。マンゴーの実をおみやげにと出されたが、そりゃ、家に持って帰るわけにはいかない。出家は蓄えるべからず。

テヤク捨離しなかつたら、どうして神をつかめるかい？ もし、一つの品物の上にもう一つ品物がのつかっていたら、はじめの物をとり除けなけりゃ、どうやってもう一つの物をつかめばいいんだね？

ニシユケマ無私(原典註)の気持ちであの御方を呼べ。だが、欲張り(原典註)な祈りも長い間続けているうちに、終い(原典註)には無私の祈りになってくる。ドルヴァは領土を手に入れるために願掛け苦行をしていたが、至聖(原典註)さまを手に入れてしまった。彼はこう言った——「ガラス玉を探しに行つて黄金に出くわしたとしたら、そのまま放つておけるかい？」

〔慈善、寄付の行為とタクル、聖ラーマクリシユナ——チャイタニヤ様の施し〕

「サットヴァ性になると神を得られる。慈善や寄付のようなことを、世俗的な人間はたいてい、何か利己的な目的のためにやっている。これはよくない。だが、無私の気持ちでするならいいことだ。けれども、こういうことを無私の精神でするのはとても難しいことだ。

神様にお会いした時、こんなふうに申し上げるかね——『私はこれこれの貯水池、道路、水汲場、施療所、病院などを建てたいのでございます。神様、どうぞ都合よくいきますように——』あの御方にお会いしたら、こんな願望はみんなどこかへ置き忘れてしまおうよ。

では、慈善行為はしちやいけないのか？

そうじゃない。不幸にあつたり苦しんだりしている人を見たら、金を持っているならあげるべきだよ。智者はこういう——『あげよう、あげよう。さあ、何でもあげよう』でも、心のなかでは、『私に何ができる。神だけが行為者で、ほかのものは一切何もしていない』こんなふうに思っている。

偉大な魂の人たちは、人間の苦しみ、悲しみに心を痛めて、至聖の道を教えて下さる。シャンカラ大師は人びとを導くために、明知の私を残しておきなすつた。

食物や品物の施しより、智識の施しや信仰の施しの方が勝っている。だからチャイタニヤ様は、賤民も区別なく信仰をお与えになったのだ。肉体をもっていれば幸と不幸はどうしてもついて回るさ。ここにマンゴーを食べに来ているんだから、マンゴーを食べりゃいい。必要なものは智慧と信仰だ。神だけが実在で、ほかのものはすべて、非実在(仮)のものだ。

〔Free Will(自由意思)はあるか否か——タクールの断定〕

聖ラーマクリシュナ「神様が何もかもなさるんだよ。じゃあ、人は罪を犯してもいいのか、と尋ねても知れん。そうじゃない。神が行動者であって自分は何もしていない、ということが本当に正しくわかってる人は、決して間違った場所へ足を踏み入れないよ。

イギリス人たちがフリーウィル(自由意志)と言っているもの——あの自由意志という感覚は、あの御方が与えておいて下さったのだ。

神を覚っていない人々のなかにあの自由意志が宿ってなかったら、罪は増える一方だったろうよ。罪を犯したのは自分の責任なんだ、という感じを神が与えておいて下さらなかつたら、罪はもつともっと多くなっているだろうよ。

あの御方を覚った人たちは、自由意志は見かけだけのものだ、ということを知っている。実はあの御方だけが使い手で、わたしたちは道具にすぎない。神がエンジニアで、わたしは車輪なんだ」

グルデーヴ お師匠様、聖ラーマクリシュナ——信者のために泣き、祈る

キールタン 時計は四時を打ったところだ。パンチャパティ 五聖樹の杜の小屋で、ラカールとほか、一、二の信者が、モニの讃神歌を聞いている——

家の外戸を百度叩き

じりじり じりじり 入り行く

ラカールは歌を聞きながら半三昧状態になっている。

間もなく、聖ラーマクリシュナが五聖樹パンチヤパティの柱バにおいてになった。いっしょにブラウムとハリシュも来て、ラカールとモニたちの仲間に加わった。

ラカール「この人は今日、讃神歌キールタンを上手うたに唱うたってくれて楽しませてくれました」
すると、聖ラーマクリシュナも半三昧状態になってお唱うたいになる――

ああ 友よ 私は生き返った――

クリシュナの御名を聞いて

(モニに向かって)――「こういう歌をうたおうよ。――友、みな共に坐り、ラーダーは法悦ダに浸まって、喜びダの市場は終わった！」

それからこうおっしゃった。

「このほかに何がある？ 信仰バグダ、そして神バの信者バといっしょに過ダごすことのほかに！」

〔聖ラーダーとヤシヨーダーの会話——タクルルの身内〕

聖ラーマクリシユナ「クリシユナがマトウラーに行つてから、ヤシヨーダーが聖女ラーダーのところに来てみると、聖女（ラーダー）は深い瞑想に入つていた。そのあとでヤシヨーダーにこう言つた——『私はアディヤシャクテイ（根元造化力）です。私に何なりと願ひ事をなさい』——ヤシヨーダーは答えた——『今さら、何も願うことはありません！ でも、これだけは——この身と心と言葉で彼に仕えることができるように。——この目で彼の信者を見られるように。——この心で彼を考え瞑想できるように。——言葉を使つて彼の名を呼び、讃歌をうたえるように』

でも、よく成熟うれきつた人たち（不動の信仰に安住した人）は、周囲に信者たちがいなくてもやつて行けるだろう。たまには、信者たちとの関係さえ好まないこともある。これは神の存在を、内にも外にも感じてゐる人だ。真珠貝をはめ込んだ壁に白塗りはできない。石灰がつかないからね。

タクルルはジャウ樹台ツツから戻つてこられて、再び五聖樹パンチャバティの杜でモニとお話をなさつてゐる——

「お前は女のような声だね。こんなふうな歌を習つてみないかい？ 友よ、まだ着かないの？ 私の美しいシヤーマがシいる森にシ」

（バブラームの方を見ながらモニに）ね、わたしの身内は他人になつたよ——ラームラルや他の親類たちも縁遠い人のようなのだ。他人だつた人が身内になつた。まア、見てごらん、わたしがバブラームにどんな言い方をするか——『小便してきて顔を洗え！』なんてね。今はもう、信者たちがわたしの身内なんだ』

モニ「ほんとに、その通りでございますね」

〔以前、狂気の様相だった五聖樹の杜での修行(1887-88)——チットシヤクテイとチッタートマ〕
聖ラーマクリシユナは五聖樹の杜を眺めながら——

「この五聖樹の杜で坐つたものだよ。そのときは気違ひみたいだった！ それも過ぎ去つた！ 時が
ブラフマンなんだよ。カーラと交接する御方がカーリー、つまり根元造化力なんだ！ 動かないもの
を動かして下さるんだよ」(訳註、カーラ——時、死、黒、シヴァ)

こうおっしゃってタクルは歌われた——

思うだけでも 命が震える

あの方の御名で カーラ(死)の恐怖は消え去り

マハーカーラ(シヴァ)さえも 御足の下に横たわる

どうしてあの方 カーラ(黒)なのか

聖ラーマクリシユナ「今日は土曜日だよ。大実母カーリー堂に行け」(訳註——火曜日と土曜日は大実母
の礼拝に吉兆の日とされている)

バクル樹台の近くになると、タクルはモニにおっしゃつた。

「チッタートマとチットシヤクテイ、チッタートマがプルシヤで、チットシヤクテイがブラクリティだ。チッタートマが聖クリシユナで、チットシヤクテイが聖ラーダー。信者たちは一人ひとり、あのチットシヤクテイの様々な相^{すがた}だ。信者たちは、(神に対して)女友達の態度か召使いの態度でいること——これが一番大事なことだよ」

日が暮れて、タクールはカーリー堂にいらっしやった。そこでモニが大実母^{ママ}を瞑想しているのを見て、たいそう満足なさった。

〔信者たちのために宇宙の大実母のもとで泣く——信者たちへの祝福〕

どのお堂でも献灯^{アールテイ}の儀が終わった。タクールは自室の小寝台の上に坐って大実母^{ママ}を瞑想していらっしやる。床にはモニひとり^{ひとり}が坐っている。

タクールは三昧に入られた。

間もなく三昧は解けた。そして恍惚とした様子で、タクールは大実母^{ママ}と話をしておられる。幼い子が母親に何かせがんでいるような様子である。大実母^{ママ}に向かって哀れっぽい声でこう言っておられる——「あ、マー、どうしてあの姿を見せてくれなかったの！ あのウツトリするような姿をさ！ あんなに頼んだじゃないか！ 頼んだのに聞いてなかったのかい！ 気まぐれ母ちゃん」

独特な節まわしで大実母^{ママ}と話しておられるのを聞けば、岩も溶け出してくるにちがいない。

タクールはつづけて大実母^{ママ}と話しておられる。

「マー、信念が要るね。分別ヴァイチャールなんか消えてなくなれ。牛の小便ヴァイチャールみたいな考えは七回たれるところ、一回(の信念)だけにしとけ。信念が要る——師ゾルの言葉に対する信念が。子供のよくな信じ方だ！ あそこにおバケがいると母さんが言ったら、ほんとにおバケがいると信じこむ！ あそこには鬼が住んでると母さんが言えば、そのまま信じこむ！ あの人はお前の兄さんだよと言われれば、百二十五パーセント、兄さんだと思ってる！ この信念がほしい！ (訳註、牛の小便……小便が一滴、牛乳に混ざるだけで飲めなくなるように、ああだろるか、こうだろるか、と分別ヴァイチャールするのは害になるだけで、役に立たないことの譬え)

けれども、マー！ あの連中が間違っているとも言えないよ！ だって、他にどうすりゃいいのさ！ 分別ヴァイチャール推量も、一度は通らなけりゃならないからね！ ——ほら、あの日、どんなに言っつきかせたか、見ていなかったかい。何にもならなかったけど——今日は、完全に——***——(訳註、あの日——

一八八三年九月二十六日を参照のこと)

タクルは大実母マに向かつて、とぎれとぎれに哀れな声で泣きながら祈っておられる。まあ、何とということだろう！ 信者たちのために大実母マに泣きすがっておられるのだ。——「マー、あんなのところに来ている人たちの希望を、みんな叶えてやっておくれ！ 何もかも捨てさせないでおくれよ、マー！ でもまあ、最後にはあんなの思い通りにおし！」

マー、この世俗に置いておくんなら、ときどきはあんなを見せてやっておくれ！ そうでなかったら、どうして生きていけるだろう。マー！ ときどきは見せてくれないと、勇気が湧いてこないよ。でもまあ、そのあとで好きなようにしておくれよ」

タクールはまだ半三昧状態である。そのまま突然、モニに向かってこうおっしゃった――

「コラ、お前はもう、さんざ考えただろう！ もう止める。もうしないね？」

モニは合掌して答えた――「はい、しません」

聖ラーマクリシユナ「もう、ずいぶんやっただろう！――最初来たばかりのとき、わたしはお前に話したね、お前の内容うちわけ（属する処）を。――わたしはみんな、知ってるだろう？」

モニ「（合掌して）はい、その通りでございます」

聖ラーマクリシユナ「お前の内容うちわけ、お前がだれであるか、お前の内も外も、お前の過去世のことも、お前が将来どうなるかということも。――わたしはみんな、知ってるだろう？」

モニ「（合掌して）はい、おっしゃる通りでございます」

聖ラーマクリシユナ「子供がいると聞いて叱ったね。――今は家にかえて暮らせ。家の人たちに、自分は家族のものだということを知らせてやれ。でも内心では――自分は家族のものではないし、家族も自分のものではないことを、しっかりと心得ておくだよ」

モニは沈黙していた。タクールは再び、

聖ラーマクリシユナ「それから、お父さんと仲よくしなさい。お前はもう飛ぶことを学んだが――お前、お父さんに向かって五体投地の礼拝ができるかい？」（訳註、五体投地の礼拝――体の八つの箇所＝頭、目、口、胸、へそ、手、膝、足を地につけ、全身を真っ直ぐに投げ出してする最高の礼拝）

モニ「（合掌して）はい、出来ませす」

聖ラーマクリシユナ「もう何も言うことはない。お前はみんな知っているね？ みんな、わかったね？」

モニは黙っていた。

聖ラーマクリシユナ「みんな、わかったね？」

モニ「はあ——。少しずつ、わかって来つつあります」

聖ラーマクリシユナ「たくさんわかってるよ、お前は。——ラカールがここに住んでいることを、あれのお父さんは喜んでるんだよ」

モニは合掌したまま黙っていた。聖ラーマクリシユナはまたおっしゃる——

「お前が思っていること、それも実現するよ」

〔信者と共にキールタンの喜び——大実母¹と生みの母——どうして人間の姿での遊戯^{リイライ}なのか？〕
タクールは平常の意識に戻られた。部屋にはラカールとラームラルがいる。ラームラルに歌をうたうようにとおっしゃったので、ラームラルは歌った——

一、戦いの場を照らす

あの女は誰だ！

一八八四年十月十八日に全訳あり

二、戦いくさの場ばで舞まい踊おどる

目もと涼すずしき美女みよめは誰たれぞ

雷雲かみかける稲妻いなづまか

血汐ちしほの池いけの白蓮しらねか

聖せいラーマクリシユナ「大実母だいじつぼと生うみの母はは。宇宙世界うちゅうせかいという相すがたで存在そんざいして、あらゆるところに充みち満みちている御方ごなたが大実母だいじつぼ。肉にく体たいを生なんでくれた方なたが生うみの母はは。わたしは、ッマー、マーゝと呼よびながら三さん昧まいに入いったものだよ！ッマー、マーゝと呼よぶことで、神かみを引ひき寄よせたものだ！ちようど漁師りくしが網あみを投なげておいて、しばらくしてたぐりよせるとでっかい魚いしが何匹いくぱいも入いつてるように——」

〔ガウリー・パンデイトの話——カーリーと聖ガウランガは一つ〕

「ガウリーが言いっていたが、ッカーリーとガウランガチャイタニヤは一つであると知しったとき、真正ほんとうの智ち識しきを得えたのだゝと。ブラフマンである御方ごなたがシャクティ（カーリー）だ。その御方ごなたが人間にんげんにあらわわれて聖ガウランガにななったのだゝ」

アデイヤシャクティそのものが人間の姿すがた、聖せいラーマクリシユナとななってこの世よに來きられたのだといいうことを、それとなくおっしやったのだらうか。ラームラルさんはタクールのお言いいつけで、再び歌うたい出した。今度は聖ガウランガ遊あそ戯びの歌うたである。

ああ、何という光景を見たことか――

師ケーシャブ・パールラテイの庵のなかで

聖ガウランガは不思議な光につつまれて

神の慈愛のよるこびに

あふれる涙は百筋の川になって流れん

ケーシャブ・パールラテイ――聖チャイタニヤ
(＝聖ガウランガ)の師匠

一八八三年十二月十四日に全訳あり

ガウルの愛の大波

わが身にかかりぬ――

一八八四年九月二十八日に全訳あり

聖ラーマクリシュナ「(モニに向かつて)永遠不変ニテイヤのものが遊戯活動リラしているんだよ。信者のために活動リイしているんだ。あの御方を人間の姿として見たとき、はじめて信者たちはあの御方を愛することができるとができる。だからこそ、兄弟、姉妹、父、母、子供として愛情を注ぐことができるんだよ。

あの御方は信者を愛しているから、小さくなつて(人間の姿となつて)、遊戯活動リラするために来られるんだよ」